

3 ヴァナキュラーな価値（73～113 頁）

- 人間的な環境は、食物、禁止された食物、非食物から構成されている。同様に、論争上の問題も、合法的問題、非合法な問題、非問題（まったく意味をなさないと思われる問題）に区分することができるが、三番目のような問題を提起すると、悪魔のようなやつだと思われるか、ひどくむなしいことをしていると考えられる危険がある。
- 〈ヴァナキュラーな領域〉と〈影の経済〉を区別しようという提起は、まさにそのような問題であり、イリイチとしてはこの区別を議論可能な領域へ引き寄せたいと考えている。
- 経済学者は、自分が計測できる領域しか扱うことができないので、非市場的な領域を対象とするためには、目盛りをつける新たな物差しを必要とする。貨幣が通貨でないところで機能するためには、その概念は独自のものでなければならないが、経済学という学問分野の分裂を避けるためには、新しい分析用具は旧来のものと矛盾するものであってはならない。
- ピグー⁷は、〈影の価格〉をそのような用具の一つとして定義したが、それは金銭の支払いなしに行われる財やサービスの換算に必要な貨幣のことであり、その操作的に仮定された貨幣のもとで、支払われないもの、価格のないものさえが、商品の世界と矛盾しない開発可能な領域に登場することとなった。
- 〈影の経済〉は、正規の経済を反映したものであり、二つの領域は共働的に作用し、産業社会の全体を構成している。産業的生産の増大につれて、労働、価格、ニーズ、市場の管理は強化されるが、〈影の経済〉はそのあとを追い、それに対応する活動を全面的に展開する。
- このような〈影の経済〉の拡張は、経済学者による新しい領土の発見に他ならないが、彼らはコロンブスがそうだったように、自分たちの発見が何を意味しているかを知らない。
- 産業的な世界の中で、〈影の経済〉学が占める領域は、イリイチがヴァナキュラーな現実と呼んでいる実態＝実在的な領域、すなわちサブシステムの領域を補足するものである。
- 二十世紀の古典的な経済学の立場からすると、〈影の経済〉と〈ヴァナキュラーな領域〉とはともに市場の外部にあって、金を支払われることのない領域である。それゆえ、両者はインフォーマルな部門にとりこまれており、無差別に「社会的再生産」に寄与するものとみなされている。それゆえ、支払われない労働とサブシステムのための

⁷ Arthur Cecil Pigou - 1877 年 11 月 18 日 - 1959 年 3 月 7 日、イギリスの経済学者。経済学者アルフレッド・マーシャルの後継者であり、「厚生経済学」と呼ばれる分野の確立者として知られる（その名称は、彼の主著『厚生経済学』初版 1920 年に由来する）。兄弟弟子であったジョン・メイナード・ケインズが反古典派経済学であるケインズ経済学を立ち上げ、それに真っ向から対立し古典派経済学を擁護した。古典派経済学が影響力を失っていくなかで最後まで古典派の立場に立ち擁護したことから「古典派最後の経済学者」と称される。

活動はしばしば混同されているが、前者は産業社会だけに特有のものであり、後者はヴァナキュラーな社会に特徴的なものであるとともに、産業社会の中でも存在しうるものである。

- 現在の变化は、消費のために苦勞が増え、消費が約束する心の安らぎが減っていることにあり、問題は、労働集約的な消費と、サブシステムをめざす現代的な諸形態とのあいだの選択として立ち表れており、それが影の経済の拡大とヴァナキュラーな領域の回復との差異に対応しているが、そこは経済学の実分析の旨点となっている。
- そこからイリイチは、産業社会における日常の話し言葉の経済的な性質と、産業化以前の時代の話し言葉が持っていた意味の比較検討に赴く。
- 1492 年 8 月 3 日の早朝、クリストファー・コロンブスはパロス港を出帆した。コロンブスはジパングを目指し、その航路を発見することが旅の目的であった。
- コロンブスが冒険の援助を女王イザベラに求めた時、女王は最初、コロンブスの要求を却下した。女王は己が理性と官僚の判断に従っていたからだが、やがてフランシスコ会修道士によって心を動かされ、以前の決定を取り消し、コロンブスとの「契約」⁸に署名した。
- イリイチは、この決定こそ本国における新たな戦争、すなわち女王に従う国民の〈ヴァナキュラーな領域〉を侵害することになる、その後数世紀にわたる戦争の開始を意味しているという。
- コロンブスは、1492 年 10 月、自分も女王も予期しなかった土地に行き当たる。10 月 13 日の日記には、サント・ドミンゴ島（イスパニョーラ島）で彼を歓迎してくれたナイチンゲールの鳴き声を記されているが、そんな鳥はそこにはいなかった。彼は死にいたるまで、自分の捜し求めた、中国の海辺に住むスペインの小夜鳴鳥を見つけたと確信しつづけていた。
- 同じ頃、スペイン以外ではほとんど忘れられてしまったエリオ・アントニオ・デ・ネブリハが、女王の臣民をまったく新しいタイプの従属へ移すことを主張していた。彼は、文法という新しい武器を女王に贈ったのである。それは新手の傭兵、知識人（*letarado*）の手で用いられるものだった。
- ネブリハの『カスティリア語文法』、その序文：
スペイン本土とわが海洋に浮かぶ島々の女王、自然の統治者の名をもつ高貴かつ賢明

⁸ サンタ・フェ契約・1492 年 4 月 17 日、グラナダ郊外のサンタ・フェにて、コロンブスはスペイン王室と「サンタ・フェ契約」を締結した。その内容は、

- 1.コロンブスは発見された土地の終身提督（アルーランテ）となり、この地位は相続される。
- 2.コロンブスは発見された土地の副王（ピリレイ）及び総督（ゴベルナドル・ヘネラル）の任に就く。
各地の統治者は 3 名の候補をコロンブスが推挙し、この中から選ばれる。
- 3.提督領から得られたすべての純益のうち 10%はコロンブスの取り分とする。
- 4.提督領から得られた物品の交易において生じた紛争は、コロンブスが裁判権を持つ。
- 5.コロンブスが今後行う航海において費用の 1/8 をコロンブスが負担する場合、利益の 1/8 をコロンブスの取り分とする。

というものだった。

なイザベラ第三世女王陛下へ。

アントニオ・デ・ネブリハ師が新たにカスティリア後について記した文法書がここにできあがり、まず最初に序文をしたためます。お読みいただけますなら幸いに存じます。(83 頁)

- グラナダの征服者はひとつの請願を受け取ったのだが、ネブリハの要求は、女王に国内の新たな領域への侵入を促していた。彼はイザベラに、彼女の臣民たちが話す言語を植民地化する道具を提供した。つまり民衆の話しことばの代わりに女王のことば(lengua)、彼女のことばづかいを強制することを要求したのである。

- カスティリア文法の序文(続)：

威光あふれる女王陛下。文章に保存されてきた過去の遺産をつくづく考えるとき、私はいつも、こういう同じ結論に到達せざるをえません。すなわち、言語はいつも帝国の伴侶でありましたし、また永遠に同志としての役割を果たしつづけるであります。帝国は国語とその誕生を同じくし、ともに成長し栄え、そしてともに衰退するものであります。(84 頁)

- ネブリハは、ユダヤ人改宗者の子孫で、19 歳のときにラテン語が死語となってしまったという判断を下している。それから、彼はイタリアへ行ってラテン語の採取に努め、その後スペインに戻り、古典の文法と修辞学の再生に専念し、20 年間の研鑽を経て、1482 年に最初の著書『ラテン語文法』を出版している。

- その後ネブリハは、スペインの話しことばの形からひとつの言語をつくることができるということ、ひとつの言語を工作し(engineer)、科学的に合成することができることに気づき、『スペイン語文法』を執筆した。

- このような文法書の成立は、近代ヨーロッパ言語の中でも最初のものであり、ネブリハは「イスパニア基本法」の法的なカテゴリーを言語の領域に拡張するために、彼の古典の教養を利用したのである。

- 文法書完成の 1 年後、ネブリハは文法書とともに、今日まで古スペイン語の唯一で最良の資料であるひとつの辞書を書き上げた。

- ネブリハのカスティリア語についての考え方：

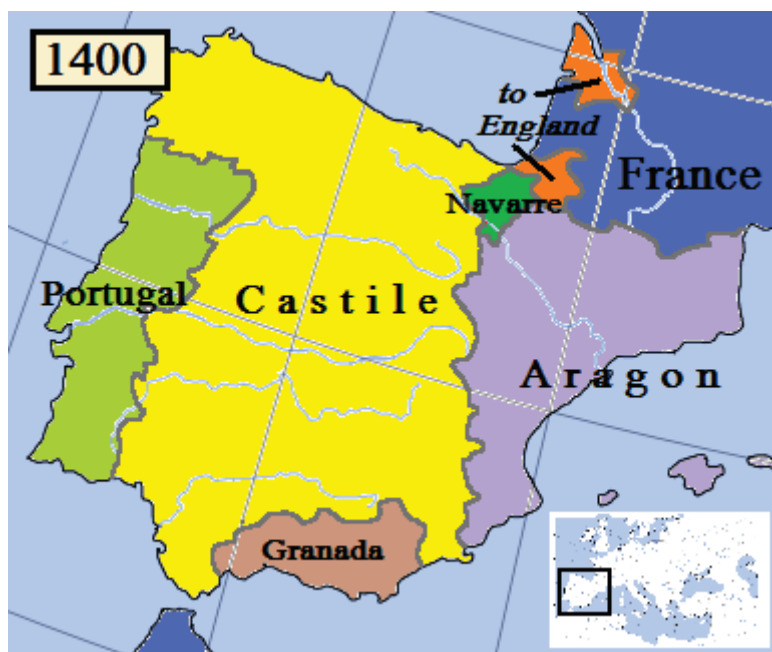
カスティリア語は士師(the judges)の時代に〔裁判官やカスティリアの王やレオンの時代に〕幼年期を経て、アルフォンソ賢王のもとで力を増しました。……ギリシア語およびラテン語の法律書や歴史書を収集し、それらを翻訳させていたのはこの王でありました。(87 頁)

- アルフォンソ(学者王ないしは賢者)⁹は、書記の俗語やヴァナキュラーなことばを大

⁹ アルフォンソ 10 世 Alfonso X, 1221 年 11 月 23 日 - 1284 年 4 月 4 日、カスティリア王国の国王(在位:1252 年 - 1284 年)。一時はドイツ王(在位:1257 年 - 1275 年)でもあった。フェルナンド 3 世と最初の王妃ベアトリス・デ・スアビアの長男である。学芸の振興に努めたため「賢王」「賢者」「学者」を意味する el Sabio の別名で知られている。アルフォンソ自身は権力の基盤は英知にあると考えており、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教を統べる「三宗教の王」と称されることを好んだ。また、現在のスペイン語の母語となったカスティーリャ語の確立者の一人とみ

法院の言語として使用したヨーロッパで最初の君主であり、自分がラテンの諸王の一人ではないことを証明したいという意図を持っていた。

- アルフォンソの臣下、その翻訳者たちの大半はトレド出身のユダヤ人で、彼らの言語は古カスティーリア語だったので、彼らはオリエントの言語をラテン語に翻訳するより、そのヴァナキュラーな言語に翻訳することを好んだ。



15 世紀のイベリア半島の諸王国

- ネブリハは、このアルファンソ王の遺産をもとに、ヴァナキュラーな話しことばを法律の作成、歴史の記録、古典からの翻訳にしようすることで、ヴァナキュラーな言語を厳密な意味での言語に変えることをめざして仕事をしていた。

- ネブリハはこう続ける：

われわれの言語は、海外支配のためにわれわれが送り出した兵士たちの後につづいていきました。それはアラゴンに広がり、ナヴァラに広がり、イタリアにさえ広がりました。……こうして、この散在するスペイン領土の断片や小片が集められ、ひとつの王国へと統合されるにいたりました。(88 頁)

- ネブリハは、剣と書物のあいだに新しい協定が可能であることを女王に気づかせた。彼が提案した協定とは、海外征服の機関と王国全土のなかの多様な科学的支配組織を含むような剣と専門知識との協定であり、俗界と聖界とを架橋する盟約であった。

- イザベラ女王は、ネブリハがあらゆる人間の中で最も開明的だと賛美した女性であり、

なされており、「カスティーリャ語散文の創始者」と呼ばれている。彼の治世にカスティーリャの文化・宗教双方の中心地はコルドバから首都のトレドに移り、アラビア文化を学ぼうとするヨーロッパ各地の研究者がトレドに集まった。

キケロ¹⁰、セネカ¹¹、リヴィウス¹²を原語で読み、精神界と物質界とを「洗練された趣味」と呼んだものに一体化させる感受性を備えていた。彼女はフェルディナンド王とともに、二人が継承した混沌たるカスティリアに形を与えようとしており、近代国家の形成に適した諸制度を創り出そうとしていた。

○ネブリハが語ったのは、帝国と言語との結婚であり、彼が語りかけた相手は、ごく最近、教会から宗教裁判所を奪って、王権の世俗機関として使おうとしていた主権者であった。この君主国は、大公たちに対する経済的支配力を手に入れ、貴族を知識人（letrados）におきかえるために、宗教裁判所を利用した。このような施策によって、古い諮問機関は文民の官僚組織に置き換えられていった。

○ネブリハの言語観：

この統一された至高の機関は、何世紀かかっても破壊することのできないほどの内的な結合力と形態をそなえたものとなるでありましょう。教会が純化され、こうして神との和解がなりましたからには、また「信仰」の敵がわれわれの武力によって制圧されていますからには、さらにまた正義の諸法が強化され、われわれすべてが平等に生きることが可能となりましたからには、平和な諸芸が栄えること以外に何が残されていましょうか？ 諸芸のなかでもわれわれと野獣とを区別する言語の諸芸が第一のものであります。言語は人間独自のものであり、瞑想に次ぐといえる理解の手段なのです。（89～90 頁）

○この一節には、文明化したキリスト教徒の世界を野蛮の世界から守ることを女王に訴えているフマニストの声がはっきりと聞こえてくる。中世の野蛮人神話では、野蛮人は話すことができないとされており、話に一貫性を欠き黙りこくっていることは野蛮なことで、罪深く、呪われたことであるとされていた。

○ネブリハの言語観（続）：

これまで、われわれのこの言語は移り動き、規則にしたがわぬままでした。それゆえ、ほんの数百年のあいだに見分けのつかないほど変化してしまいました。われわれが今日話していることばを五百年前のことばと比較してみるなら、この二つが別々の外国語であるにしても、これ以上に大きくはありえないような差異と多様性のあることに気づくことでありましょう。（91 頁）

○ネブリハはここで、ヴァナキュラーなことばである俗語が時とともに進化し拡散していくことを述べている。十五世紀の人々は、今日われわれが言語を感じ、言語とともに生きているのとは異なる感じ方、生き方を自分たちの言語にたいしてとっていた。このことを理解するためには、メンデス・ビダルの手になるコロンブスの言語の研究

¹⁰ マルクス・トゥッリウス・キケロ Marcus Tullius Cicero - 紀元前 106 年 1 月 3 日 - 紀元前 43 年 12 月 7 日、共和政ローマ期の政治家、文筆家、哲学者。

¹¹ ルキウス・あるいはマルクス・アンナエウス・セネカ Lucius-, Marcus Annaeus Seneca - 紀元前 54 年頃 - 後 39 年頃、古代ローマの修辞学者、著述家。小セネカの父として大セネカとも呼ばれる。

¹² テイトゥス・リウィウス Titus Livius - 紀元前 59 年頃 - 17 年、共和政末期、帝政初期の古代ローマの歴史家。単にリウィウスと呼ばれることが多い。アウグストゥスの庇護の下に『ローマ建国史』を著した。

が役に立つとイリイチは言う。

○コロンブスはジェノヴァ出身の織物商人であり、彼の最初の言語は、今もなお標準語化されていないジェノヴァ語である。彼はやがて、粗野な表現ではあったがラテン語で商業文を書けるようになった。その後、彼はポルトガルの女性と結婚する。彼はイタリア語を忘れ、ポルトガル語を話しはしたが、一語も書くことはなかった。リスボンにいた九年間に、彼はスペイン語で文章を書き始めた。彼はいつもポルトガル語の入り混じった癖のある文体でスペイン語を書いた。こうして、コロンブスは話すことのない二つの言語（ラテン語とスペイン語）で書き、数ヶ国語を話した。

○このようなコロンブスにみられるような言語習得の状況は、彼と同時代の大多数の人にとっては問題とならなかったようだが、ネブリハの眼には、彼があやつる言語はいずれも言語とは写らなかったに違いない。

○ネブリハの請願：

女王陛下、私の絶えざる望みは、わが国家が大きくなること、そしてわがことばを話す人々に、彼らの余暇にふさわしい書物を提供することでありました。目下のところ、彼らは小説や虚偽にみちた空想物語に時間を浪費しています。(92～93 頁)

○ネブリハは、生きている言語を、印刷体にするときの便宜のために標準化するということを主張した。この議論は現在でも行われていることだが、その目的は当時の議論とは正反対である。ネブリハが頭を悩ませたのは、ヴァナキュラーな言語で話す人々が蔓延した読書熱の犠牲となっているということであり、その読書熱を冷ますために標準化が必要だと考えたのだ。

○ネブリハが口語の標準化を提案したのは、印刷という新しい技術をヴァナキュラーな領域から取り除くためであり、人々が当時までただ話すだけだったさまざまな言語で印刷したり読書したりすることを妨げるためである。彼は、教えられない野生のヴァナキュラーな言語の読書を抑圧することを提案したのである。

○ネブリハの議論の意味を理解するためには、当時の印刷技術を理解しておかなければならない。取り外しのきく活字が最初に使用されたのはネブリハが十三歳のときである。彼の自覚的な成人期は印刷の「揺籃期」初期印刷本（インキュナブラ）¹³と一致している。印刷機ができて二十五年後に彼の『ラテン語文法』が出版され、三十五年後に『スペイン語文法』が出版された。

○各国の民衆の言語で出版された本には四種類あった。ヴァナキュラーな土着文芸、フランス語およびラテン語からの翻訳、信仰の書物、そして教師を不必要にするハウツーものの手引書である。ラテン語で印刷された書物はこれらとは質的に異なるもので

¹³ incunabula、単数形は incunabulum、西欧で作られた最初期の活字印刷物のことであり、15 世紀（グーテンベルク聖書以降、1500 年まで）に活版印刷術を用いて印刷されたものを指す（本だけではなく、一枚物（ブロードサイド broadside）も含む）。揺籃印刷本、インクナブラともいう（incunabula はラテン語でゆりかごの意味）。1455 年にグーテンベルクによる「グーテンベルク聖書」が出版されてから、およそ半世紀の間に、ヨーロッパ各地の都市（ドイツ、フランス、イギリス、イタリア、ネーデルラントからスウェーデン、スペイン、ポルトガル、コンスタンティノーブルなどまで）に活版印刷術が伝わり、約 4 万版が刊行されたという。

あり、教科書、儀礼書、法律書からなっていた。そして、印刷された書物は、当初から二つの種類に分けられる。一つは、読者が自分の楽しみのために自主的に選択した書物、もう一つは、読者自身の役に立つように専門的に処方された書物である。

○十五世紀のあいだに、総計千五百万冊から二千万冊におよぼほぼ四万部の書物が出版されたが、これらの書物の三分の一はヨーロッパのさまざまなヴァナキュラーな言語で出版された。そして、印刷された書物のこの部分がネブリハの心配の種だったのである。

○読書の自由についてのネブリハの憂慮をより完全に理解するためには、彼の時代の読書が黙って読むものではなかったことを思い起こす必要がある。黙読というのは最近の発明である。

○大きな声で読むという慣習は社会的効果をもたらすものであり、共同体の意思交換を促進する。そして、それはネブリハの時代以前には普通のことであり、読書熱は、印刷術の発達にともない流行病のように増大し、蔓延したのである。さらに当時の読み書きできる者とは、ラテン語を教えられていた人であり、その数は非常に少なかった。

○ネブリハの提案は、女王にとって、コロンブスの企画より一層ありえないことのように思われたに違いない。しかし、それはハプスブルク家の興隆にとって、「新世界」以上に根本的なものであることがわかった。ネブリハは、印刷技術の自由で無政府的な発展を阻止する方法を明示したのであり、それを発展する国民国家の官僚的統制の道具へと変える方法を明示したのである。

○ネブリハの方法論：

私の文法によって、人々に人工のカスティリア語を学ばせます。それは彼らの知っている言語にもとづいてつくられているので、そうすることは困難ではありません。そして、そのときラテン語はやさしいものとなるでしょう…… (99～100 頁)

目下のところ、人々は小説や虚偽にみちた空想物語にその時間を浪費しています。それゆえ、私の最も緊急な課題は、カスティリアの話しことばをひとつの人工語に変えることであると心にきめました。そうすれば、それ以後この言語で書かれるものはすべて、ある標準的な性格を持つことになるでしょう。(100 頁)

○ネブリハの文法は、彼自身によって国民国家の柱石と考えられ、結果として国家は、当初から攻撃的なまでに生産的な代理機関とみなされている。新しい国家は、人々の生存を基礎付けることばを人々から取り上げ、それを規格化された言語へと変えた。以後、人々は、各人が制度的に負わされている教育の次元で、この標準化された言語を使うことを余儀なくされ、上から受け入れた言語に頼らざるをえなくなる。

○ヴァナキュラーな言語から公的に教えられる母語への転換は、商品集中社会が到来したときに、おそらく最も重要な意味を持つにも関わらず、最も研究されることの少ない出来事である。

○ヴァナキュラー言語から教えられる母語への変化は、以下に示す転換を予示するもの

である。母乳から哺乳ビンへ、サブシステンスから福祉へ、使用のための生産から市場のための生産へ、教会から国家への転換である。

- 全ての個人が、人間の生存にとって必要なサービスを手に入れようとして、公的な官僚制度に依存するという事態は根本的に新しいことであり、ヨーロッパの外にはこれに匹敵するものはない。
- けれどもこれはヨーロッパの過去との断絶を意味するのではなく、キリスト教会の内部で正当化されてものが、世俗国家に承認され期待される俗界機能へと発展していった過程である。ネブリハと近代国家における普遍的教育とを理解するためには、この教会という制度が母を象徴している限り、教会に関する正確な知識を必要とする。
- 教会はきわめて早い段階から「母」と呼ばれていた。144 年にグノーシスのマルキオンがこの名称を使った。当初、信仰者の共同体は、聖体拝領という名の共同体の祝福という事実から生まれる新しい成員にとって、母であるとされていたが、まもなく教会が母となり、その胸の外にいる者は、人間と呼ばれるに値せず、生きていることにも値しないというまでになった。
- 母としての教会という、この初期キリスト教の概念は、歴史的に前例のないものである。グノーシス派や異教の直接的な影響やローマ人の母なる女神崇拜との直接的な関係はいまのところどれも証明されていない、とされている。
- ネブリハの序文は近代的国家の建設に熱心な女王に向かって語られていたが、その議論は、それまで教会によってのみ主張されてきた普遍的な母性的機能を、国家が制度的に引き受ける必要があるということを含意していた。母なる教会の胸で最初に制度化された機能としての教育 (*educatio*) は近代国家の形成の過程で国王の機能となった。
- 子どもの教育 (*educatio proles*) とは、ラテン語の文法で女性主語を要求する語であり、教育はすべて母親の仕事であることを意味している。
- これに対して、男は教えること (*docentia*) と指導すること (*instructio*) に従事する。
- 教育という機能を自分に帰属させた最初の男たちは、母なる教会の乳があふれそうな胸 (*aima ubera*) へと会衆を導いた初期の司教たちであり、会衆たちは教会からけっして乳離れすることができなかった。
- ネブリハが手を貸したのは、この女性の機能を、聖職者によって支配された専門分化の制度的領域に移すことであった。
- ネブリハの方法論 (続) :
私はカスティリア語をひとつの人工語に変えることを心に決めました。そうすれば、それ以後この言語で書かれるものはすべて、ある標準的な性格をもつことになるであります。すなわち、時代をこえて生き続ける鑄貨となるであります。ギリシア語やラテン語は文法 (*art*) によって支配されていました。このようにして時代を通じて統一性を保ってきたのです。われわれの言語にたいして、これに類することがなされないといしますと、年代記が女王陛下の行為をいくら賞賛しても無駄でありましょ

う。われわれ自身の王にかんする外国語で書かれた物語をカスティリア語に翻訳し、供給していくことになるでしょうから。女王陛下の偉業はその言語とともに色あせていくか、それとも落ち着く場所もなしに、よるべなく、海外の異邦人のあいだをさまようかのどちらかでありましょう。(106～107 頁)

○近代ヨーロッパの国家はヴァナキュラーなことばの世界では機能することができない。新しい国民国家は、ひとつの人工語を必要としたのである。

○けれどもネブリハはラテン語を廃棄すべきだとはいわなかった。それどころか、スペインでネオ・ラテン・ルネサンスが起こったのは、主として彼の文法、辞書、教科書に起因したのである。

○ネブリハがここで確立したのは、母語の教育が必然的に作り出すピラミッドの決められた場所に、各人を位置づけるのに十分な一種の日常語という考えである。彼は議論のなかで、歴史的な名声をもとめるイザベラの要求は宣伝の言語をつくることにかかっていると主張したのであり、それはラテン語のように普遍的で変化せず、しかも全ての村々や農場へと滲透して臣民を近代的市民に変えることのできる言語であった。

○ネブリハの請願：

さて、女王陛下、陛下が私の文法から手にされるであります最後の利益に話を進めさせていただきます。そのためには、私がサラマンカで今年はじめこの本の草稿を献上したときのことを想いおこしていただきたく存じます。そのとき、陛下はそのような文法がはたしてどんな目的に役立つのかと私に質問なさいました。これにたいして、アヴィラ司教がさえぎり、私にかわってお答えくださいました。司教が申されたのはこういうことでした。「まもなく女王陛下は異国のことばを話す多くの蛮人たちを支配下に置かれることになるであります。陛下のこの勝利によって、これらの人々は新たにつぎのことを必要とするであります。それは、勝利者の被征服者にたいする義務である法律の必要と、われわれがもたらす言語の必要であります。」われわれが若者にラテン語を教えるために文法を用いたように、かの蛮人たちにカスティリア語を伝えるために、私の文法が役立つであります。(110～111 頁)

○ヴァナキュラーなことばは、臣民の領域にあり、スペイン君主の権威のおよぶ範囲をこえていた。国民国家をつくろうとする統治者は、ネブリハの計画に内在する論理を理解することができなかった。イザベラが最初拒絶したのは、ネブリハの提案の独創性を裏書するものだった。

○コロンブスは勝利を収めたが、ネブリハも同様の過程を進んでいった。そして、ネブリハはより根本的な変革をもたらすことになる。まったく新しい女王の権力を増大するために彼の文法をしようすること、また人々が毎日いとなんでいる生存のあり方を国家が管理することを論じたのである。

○ネブリハは、事実上、サブシステンスに対する宣戦布告の大綱を起草しているのであり、これは新たな国家が組織的に行おうとしている戦争である。彼が意図していたの

は、教えられた母語でもってヴァナキュラーなことばをおきかえることであった。それこそ、普遍的教育の最初の発明物なのである。

以下次回